

新約聖書 ルカによる福音書 17 章 5 節—10 節（新共同訳）

⁵使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、⁶主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。

⁷あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。⁸むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなかろうか。⁹命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。¹⁰あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「からし種」

弟子（使徒）たちはイエスに「わたしどもの信仰を増してください」と言います（ルカ 17:5）。

自分たちはすでに信仰をもってはいるけれども、さらに大きな働きをするためにもっと大きな信仰が必要だと弟子たちは考えました。

人間には、あらゆることにおいて量を重視してしまうところがあります。たとえばお金でも、「とりあえずこれだけあればいい」と思うのではなく、「もっとたくさん欲しい」と思うものでしょう。

弟子たちは信仰についても、そのような多い、少ないという観点で捉え、「自分たちの信仰を増したい」と願いました。しかし、イエスは彼らにこう言います。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう」（ルカ 17:6）。

これは、信仰があるということは、何かを所有する感覚ではとらえられない、とてつもないことなのだという、弟子たちへのイエスの答えです。信仰があるとは、人間ができることの範疇ではとらえられないということです。

非常に小さな からし種一粒ほどの信仰があれば、深く根を張る桑の木に、「抜け出して海に根を下ろせ」と命じてもその通りになるとイエスは言います（ルカ 17:6）。

イエスがこのたとえをもって示していることは、信仰は人間の所有物ではなく、神から与えられたものであるということです。信仰とは、罪の赦しと救いにおいて人間に賜物として与えられる、神の恵みの働きです。

神から私たちへのこのような働きかけは、「神への信頼」を私たちのうちに生じさせ、私たちが、隣人、他者への愛の働きをなすことへと後押しします。

マルティン・ルターは、信仰について、こう述べています。「信仰とは神の恵みに対する生きた、大胆な信頼であり、そのためには千度死んでもよいと思うほどの確信である」（『ローマの信徒への手紙序文』より）。

そしてイエスは、主人と僕（しもべ）のたとえ話をします。このたとえは、私たちがどれほど多くのことを行ったとしても、それは私たちが為すべき任務を果たしたに過ぎないことだと教えます。

このたとえは、聞き手が一世紀の僕、すなわち奴隷の実状に通じていることを前提に語られています。当時の常識では、外で畑や羊の世話をする僕と、家の中で家事を行う僕は別人でした。ところがこのたとえは、野良仕事と家事の両方を一人の僕に行わせ、それを当然のこととする主人が登場します。

主人は、畑から帰ってきた僕に「すぐ来て食事の席に着きなさい」とは決して言わないでしょう。むしろ主人は、畑から帰ってきた僕に、ただちに主人の夕食を用意するように命じます。僕は、主人の給仕を終えた後によりよく自分の食事をとることができます。そして主人は、僕が命じられたことをしても、それに感謝することさえしないのです（ルカ 17:9）。

僕（しもべ）が、自分に課せられた働きを何の称賛もなしに行うのは当然だということが、このたとえで示されています。このたとえは、私たちが神の僕であり、神から必要とされるすべてを行ったとしても、そのことで名誉や報酬を受けようとする考えは手放さなければならないと語っています。

僕（しもべ）たる者は、要求が非現実的だと思われる時にさえ、ただ必要とされ期待されることを行わなければなりません。これは、今日の福音書の直前で、イエスが弟子たちにこう語っていることとつながっています。「[兄弟が]一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい」（ルカ 17:3-4）。一日に七回兄弟を赦すように命じられることも、一日中畑を耕し羊の番をした後に主人の夕食の仕度を言いつけられる僕と同様に、名誉や報酬、感謝なしになすべき事として求められています。

相手に注いだ親切心や愛が、報われず無駄に終わったという徒労感や虚しさを、私たち人間は生活の中において感じるがあると思います。その虚しさの根っこは、自分が相手のために行ったことの見返りを求め、報酬にこだわる心持ちにあるのだと思います。

主イエスは、そこから私たちを連れ出し、私たちのまなざしを地から天に向けさせます。

私たちの行いが、報酬を得るための働きから、神に注がれる奉仕となるとときに、私たちの心は思い煩いや束縛から解き放たれ、喜びに溢れるでしょう。

さて、十月に入って日も短くなり、日が沈んで暗くなるのも早くなってきました。

季節が移り変わりゆくように、人生もこのように、早足で通り過ぎていくものなのだろうと思わされます。

ルターはその生涯の最終講義を、このような言葉で締めくくったそうです。

「私は弱っています。神が私によい、祝福された最期の時をもたせてくださるよう、どうか私のために神に祈ってください」（1545 年 11 月 17 日の創世記講義より）。

ルターのこの率直な言葉が、私の心に深く届きました。

人に与えることだけではなく、自分のために神に祈って欲しいと、隣人に自分自身を委ねることも信仰なのだと思います。

私たちは、神への信頼と、他者への信頼のもとに、自分自身を神と他者に明け渡し、ゆるしと愛をもって、共に歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。信仰は、私たちの思いを超えて働きます。私たちがあなたの御言葉に信頼し、委ねていくことができますよう、日々、御言葉によって私たちを造ってください。御子 主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 ハバクク書 1 章 1 節—4 節と 2 章 1 節—4 節（新共同訳）

¹ 預言者ハバククが、幻で示された託宣。

² 主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに／いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに「不法」と訴えているのに／あなたは助けてくださらない。³ どうして、あなたはわたしに災いを見させ／労苦に目を留めさせられるのか。暴虐と不法がわたしの前にあり／争いが起こり、いさかいが持ち上がっている。⁴ 律法は無力となり／正義はいつまでも示されない。神に逆らう者が正しい人を取り囲む。たとえ、正義が示されても曲げられてしまう。

^{2:1} わたしは歩哨の部署につき／砦の上に立って見張り／神がわたしに何を語り／わたしの訴えに何と答えられるかを見よう。² 主はわたしに答えて、言われた。「幻を書き記せ。走りながらでも読めるように／板の上にはっきりと記

せ。³定められた時のために／もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。⁴見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

新約聖書 テモテへの手紙二 1 章 1 節—14 節（新共同訳）

¹キリスト・イエスによって与えられる命の約束を宣べ伝えるために、神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、²愛する子テモテへ。父である神とわたしたちの主キリスト・イエスからの恵み、憐れみ、そして平和があるように。

³わたしは、昼も夜も祈りの中で絶えずあなたを思い起こし、先祖に倣い清い良心をもって仕えている神に、感謝しています。⁴わたしは、あなたの涙を忘れることができず、ぜひあなたに会って、喜びで満たされたいと願っています。⁵そして、あなたが抱いている純真な信仰を思い起こしています。その信仰は、まずあなたの祖母ロイスと母エウニケに宿りましたが、それがあなたにも宿っていると、わたしは確信しています。⁶そういうわけで、わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたとさせるように勧めます。⁷神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。⁸だから、わたしたちの主を証しすることも、わたしが主の囚人であることも恥じてはなりません。むしろ、神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。⁹神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えられ、¹⁰今や、わたしたちの救い主キリスト・イエスの出現によって明らかにされたものです。キリストは死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現してくださいました。¹¹この福音のために、わたしは宣教者、使徒、教師に任命されました。¹²そのために、わたしはこのように苦しみを受けているのですが、それを恥じていません。というのは、わたしは自分が信頼している方を知っており、わたしにゆだねられているものを、その方がかの日まで守ることがおできになると確信しているからです。¹³キリスト・イエスによって与えられる信仰と愛をもって、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい。¹⁴あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によって守りなさい。

教会讃美歌 202 番「東の空」、289 番「すべてのひとに」、256 番「すがたは見えねど」、357 番「主なる神を」。